



政治の崩壊と文学の死滅 内村剛介論

著者	田口 哲也
雑誌名	言語文化
巻	2
号	4
ページ	689-713
発行年	2000-03-10
権利	同志社大学言語文化学会
URL	http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000004337

政治の崩壊と文学の死滅 内村剛介論

田口哲也

かつて内村剛介という文学者がいた。いや、今もいるのだが、あえて過去形で表現したのは、彼の文学的営為は「絶筆」である『失語と断念』をもって終わったとわたしは考えるからだ。石原吉郎を語の本義において徹底的に批判しつつ、内村もまた燃え尽きていったのである。

その内村について今ごろ論を立てるとするのは、40歳を過ぎてインド体験を語るのと同じくらい滑稽であることは承知しているつもりである。しかし、たとえ時間の中に於ける歴史の歩みが不可逆な一方通行の営みであるにしても、近代に於ける表現の可能性と不可能性をぎりぎりのところで問うた内村の「呪い」は決して解けてはいない。いや、むしろそれは日増しに強くなっているのではないか。本稿でわたしはベルリンの壁の崩壊後、湾岸戦争後の時間に胎内時計を戻して内村を論じている。このような仕掛けなしには到底内村を論じられなかったことをあらかじめ告白しておきたい。

ソ連の崩壊に際して、スペシャリストの内村はやはり引っ張りだされる。「エコノミスト」に二回にわたり内村はソ連の動乱についての感懐を書いた。一回目の記事の見出しは「わが輩はカクメイである 名前はまだない」であり、二回目の見出しは「『自由』はラーゲリの中にしかなかった」であった。この見出しが誰の責任において付けられたのかはともかく、いかにも内村らしい表現になっている。おまけに、一回目には彼一流のエピグラフが付いていた。「はじめに言葉ありき。／言葉は暴力なりき。／暴力は文明なりき。」というのがそれである。これを見ただけでも、何を言おうとしているのかは、内村の読者でなくとも、大体の察しがついてしまう。ロシアの民主化運動の限界を「冷徹」に見据えているのである。いや、それはほとんど諦念ですら

ある。

果たせるかな、内村はソビエト共産党による言葉の独占がもたらした「呪縛の構造」を手慣れた手つきで再び暴いてみせ、エリツインの反革命性や、ゴルバチョフのピエロぶりを白日のもとに晒し出す。その際に、「ソビエト政治犯国際協会の声明」なる文書のもつ表現の可能性をゴルバチョフの自縛ぶりと対照させて取り上げるのを忘れないし、あくまでも言葉の問題にこだわりをみせて、テレビのインタビューに答えるオバチャンの言葉を「ろくでなしどものひっくり返しだから、そのうちにまたどんでん返しに遭うさ」と翻訳するのを忘れない。さらにだめおしとして、フランスのヌーヴォー・フィロゾフのソルジェニーツインの評価と対照させて、日本の社会主義者は会社主義者だ、などと毒舌を浴びせることを忘れず、また KGB の本部に殺到する民衆をみずから陣頭に立って抑止したエリツインとは逆に、ベルリン市民フォーラムの STASI 本部急襲の革命性について語っている。

内村は「エコノミスト」の記事でデマを飛ばしているわけではないし、91年夏のロシアの状況を過不足なく捕らえているはずなのだが、なぜかよそよそしさが漂ってしまう。例えば一回目の記事の冒頭はこんな風に始まっている。

再び「モスクワ街頭の思想」である。再びモスクワ街頭における言葉の運命についてである。

怒れる若者、エフトシェンコを『朝日ジャーナル』誌上で絶賛する秦正流に異を唱えることから、ミニコミ紙『日本読書新聞』の読み物記事「モスクワ街頭の思想」は始まっていた。ラーグリの無名作家の原稿を載せるかどうかで、いま『ノーヴィ・ミル』誌編集部はもめにもめているという街の噂が伝えられたのも、このシリーズにおいてである。今にして思えば、これはソルジェニーツインの『イワン・デニソヴィッチの一日』に関するモスクワ発、東京向け第一報なのであった。フルシチョフ雪解け期のはなしである。このシリーズは、のちに『呪縛の構造』（現代思潮社）に収められた。

自分で引用しておいて読むのが嫌になるが、すべてが回想的なこの文章が生まれた責任の大半は時代状況にある、などと無責任なことを言ってみても始まらない。内村はボケたわけではないのだろうが、同じ記事の中で引用される、アンナ・アフマートヴァやユース・アレシコフスキーの詩を読まされると、かつての熱心な内村の一読者であったわたしなどは、既視感に襲われてしまう。しかし、それでも内村はなお他の凡庸なロシア・ウオッチャーたちとはまったく別の視点からロシアを見ているという点では昔も今も変わりはないのである。ロシアは彼にとって世界そのものなのだ。二回に渡った感懐を締めくくる文章が図らずもそのことを如実に示している。「言語の独占がひとの精神を汚染しつくし、体制を呪縛して党の自滅、国の崩壊を招いた」というのがこの感懐の要旨なのだが、この呪縛の外にいたからこそ、あのソルジェニーツィンが愛読する『ダリー辞典』の増補を日本人が『研究社露和辞典』でなしえたのだというカラクーツカヤ女史の論考に内村は痛く感じ入る。内村はロシア精神にいまなおもっとも近いところにいるのである。

「ロシア文化人の部屋、それはテーブル、椅子、そしてダリーである」とさえいわれる『ダリー』を増補する榮譽に浴する日本はいまロシアにこう返してあげていいだろう。「ロシアの行方は今はたしかに名付けようがない。だがそのロシアは、ロシア人の血の一滴もない外国生まれのダリーにロシア辞書の典型を作らせている。ロシアはやはり血ではないのだ。ロシアはそれ自体世界存在なのである」と。

内村の存在の希有さは政治と文学のどうしようもない、泥沼のような係わり合いに伴う激しい緊張感を珍しくも保ち続けていたという点にある。文学的にも優れた感性を持ち、それでいて現実の政治に対してずっこけることのない一定のスタンスを取り続けるということは、実際にはほとんど不可能に近いくらいに困難なことなのである。別に大江健三郎を揶揄するのが意図ではないが、片方で極めて創造的な精神を發揮しながら、他方では余りにもナイーブな見解を流すというのがかつての文学者のあり方であった。しかしこの古き良き時代がすでに過ぎ去っていた1960年代に内村は登場してきたので

あった。片手で体制批判をやりながら、もう一方の手で学生管理を行うという教師のダブル・スタンダードに頭にきた当時の学生は文学にだけではなく、政治にも表現を与えようとしてもがくことになるのだが、この問題は後でゆっくりと触れることにして、今は内村の登場の仕方に話を戻そう。現代における表現は古典的な、政治と文学を二分するような牧歌的なありようではないことを怒りをもって表明したのが内村であった。むしろ、文学、ないしは文学者がその存在を許されるとしたら、それは避けようもない文学と政治の複合体の中にしかないというのが、内村がわたしたちに提出した最低限の了解事項であったはずである。だからこそ内村は猛烈に埴谷雄高を拒否する。あんなものは偽物だ。あんなロシアかぶれはインチキだというわけだ。「呪文の思想家を拒否す」(『呪縛の構造』所収)というなんだか北村透谷を思わせるような激烈な埴谷批判はもう一度読み直されなければならないだろう。埴谷も好き、内村も好きというようなセンチメンタリズムは許されないのだ。一体、埴谷の熱狂的な読者は何を考えているのだろうか。埴谷を平井和正と同列に読んでいるというのだろうか。それならそれでよいのだが、内村の次の言を無視するというのはどうだろうか。

埴谷は幻想発生の一点を押えようとはしない。彼は有限であるべき(マテリアリスチックに だ)闇を無限大に拡げ、この闇の中へ足元を見せずに消えてゆく。彼を導くものは刑而上の美であって、ぼくらのあさましい実存ではない。埴谷がレーニンに読んだものは刑而上・芸術としての政治であり彼はレーニンのフィジカル・メタフィジカルのはざまにおける達成のいかほども踏まえてはいはしない。

この批判の初出は1965年12月の「読書人」であるが、書物の形になって読者の目に触れるのは翌年のことであり、この『呪縛の構造』は内村の処女出版なのであった。内村を一躍「有名」にした、「スターリン獄の日本人」という副題を付せられた『生き急ぐ』は翌67年の出版であり、この時までには彼はトロツキーの『文学と革命』、ロリニカイテの『マーシャの日記』という2つの優れた翻訳をものしている。関心というふやけた言葉で言い表すのは余

りにも不謹慎であるが、とにかくこの当時の内村の心のあり方がどのようなものであったかは大体の想像がつくと思う。だからこそその埴谷批判なのである。俗な言葉で言うなら、「金持ちマルキストのおぼっちゃんの転向」に対して、内村は図らずも階級的な鉄槌を下すのである。

68年9月に「週間読書人」に発表された「ニヒリストの饒舌」はさらに激しい批判である。これは、69年の『わが思念を去らぬもの』に所収。ついでながら、このタイトルは全共闘的であるが、実際は内村が敬愛するロシアの天才詩人エセーニンの作とナロードが信じて疑わない「デミヤン・ペドヌイへのメッセージ」の第一行から取られている。この批評集には「テロリストの背理」、「蒼ざめた馬」、「サヴィンコフ断片」などのエッセイも収められていて時代の匂いが染み付いている。内村は『エセーニン詩集』をやはりこの時期に出している。内村とエセーニンの係わりについては後に議論したいが、『エセーニン詩集』は単にすぐれた訳業であるということを超えて、彼がようやく日本との接点を見だしかけていたこの時期が生んだ奇跡的な表現であった。だからこそ、埴谷が攻撃されなければならないのだ。内村は切って捨てる。

中村光夫らとともに、埴谷は、ぼくにとって、いいかげんなヨーロッパ近代にいかれっ放しの無縁な存在であって、やたらに水増しする彼の文章の饒舌には不信の目を向けねばならぬと思っている。ドストエフスキイに関する寝言については特にそうだ。だいいち、埴谷のドストエフスキイはロシア人ではない。そのうえ、「近代文学」派の埴谷には「近代」がてんでわかっていないのである。

内村はいわば埴谷に噛みつくことによって、日本的文壇のもつ限界を指摘しているとも言えよう。内村がこの時期に吉本隆明らに接近するのは当然の結果であるのだが、内村には吉本の本質がこの時まで見えていなかった。（誰がこの当時吉本の本質を見抜いていたのかという問いは重要だがいまは問わない。）だから吉本の埴谷理解は完全な誤解に基づく、内村は苦しい弁明をしなければならなかったのだろう。いずれにせよ、「あさましい実存」

を表現する者、「いいかげんなヨーロッパ近代にいかれっ放し」にならない者に目を向けると、内村は例えば五木寛之や秋山清を高く評価することになる。

いや、いたずらに内村を日本に重ね合わせることは差し控えることにしよう。「文藝」に昭和47年7月から50年6月に渡って断続的に連載された彼の日本文学論、『妄執の作家たち』がついに日本の作家たちに対する異和の表明に終わってしまったように、無理に日本に接近する必要はないのだ。内村はシベリアから氷詰めにされたスターリンの亡霊を戦後の日本に持って帰ってきた男なのであって、それ以上でもなければそれ以下でもない、とステレオタイプに今は言うておくことにする。

スターリンといえば、ヒトラーが来る。この二人は義兄弟のようなもので、とんでもないものを20世紀の世界に持ち込んでしまった。即ちファシズムと Kommunismus という大衆大の政治表現であり、この政治表現は19世紀の教養主義的な文学表現を根こそぎ破壊してゆくのである。時代は1930年代なのだ。それまでの文学表現は一括してブルジョワ文化の烙印を押され、徹底的に否定されてゆくことになる。これは文学史家の選択ではなく大衆、いやすでに19世紀に用意されていたマスを選択であり、いわば「歴史の必然」であった。30年代において、みんなはデモクラシーが消去法的に残る消極的「正解」だなどととはとても思えなかったのである。そこには、Kommunismus とファシズムの席卷、そして内村がいみきらう、Munhen精神、腰砕けの宥和政策しかなかったのである。イギリスではKommunismus を情緒的に信奉するW・H・オーデンやスティーブン・スペンダーたちがワイマール下のドイツに逃れていたし、T・S・エリオットはカトリック的保守反動の王党派のシャルル・モラスのアクション・フランセーズに、モラスがバチカンから破門されるまでシンパシイを表明していたし、エズラ・パウンドにいたってはムソリーニのファシズム宣伝に一役買って出て（パウンドのラジオ放送はパソリーニの映画『ソドムの市』にチラシと出てくる）、戦後アメリカによって国家反逆罪に問われることになる。西側では30年代の緊張は徐々に緩んでいき、やがて60年代を迎えることになるのだが、ソ連のラーゲリではこの緊張が冷凍保存され、やがてソルジェニーツィンやサハロフが登場することになる。

ところで『生き急ぐ』の著者略歴によると、内村は45年から56年までソ連に抑留されたことになっている。とんでもない長い歳月である。しかも内村は20年生まれだから20代の半ばから30代の半ばという時期をフイにしてしまったのである。このルサンチマンが風化されずに内村の言説の緊張度を形成しているのだと、わたしは思っていた。確かにそういう面もあっただろう。NHK ラジオでの加藤登紀子との対談で初めて内村の肉声を耳にした時もそんな風を感じたのだが、それにしても関西風に言うなら「しんどい」生き方をしているものと溜め息をついたのを覚えている。物書きのプライベートというよりパーソナルな面をほじくるのはためらわれるのだが、場合によっては避けるわけにいかない時がある。内村のポレミックな精神のありかたが謎めいてきた時にどこからとなく彼のなりわいが伝わってきた。ちょうど内村が小室直樹とともに「反ソ活動」に忙しかった時のことだ。

「北海道大学をやめた後、上智大学にいるそうだ。」

「北大の奴が言っていたが、ひどく愛想が悪いらしいね。」

「北大の前は、商社勤めをしていたらしいぜ。」

「それも日商岩井というから驚きだ。」

「大きな声では言えないが、スパイじゃないかという説もあるそうだ。」
ざっというところな具合だが、このままでは内村の名誉を毀損することになるから、注釈を付けておく。注釈のないゴシップなど垂れ流し同然なのだから。

まず、どこの大学にしようが、そんなことは個人の勝手だ。どんな職業に就こうとそれも同じ。職業や移動の自由は日本では認められているではないか。それから、大学の教師というのは、特に国立の場合は、無愛想なものだ。いくらサービス業になりさがったとはいえ、愛想ばかし振りまいている奴はアホウか、とんでもない腹黒と決めてかかったほうがよい。スパイがどうのこうのというのはほとんどパラノイアだが、反面顔けないこともない。情報を取り扱うのが、しかも一般の大衆が預かり知らないところで情報を扱うのがインテリなのだから、一義的にはインテリはすべてスパイということになる。ただ、シンジケートに組み込まれているかどうか、そこから報酬を得ているかどうかというのがスパイの定義になるだろうが、ここでも、それが意

識的かそうでないかの違いしか出てこないのだ。特定の団体や法人ないしは企業から金を受け取り、一定の研究成果をその特定の団体等に流す場合はほとんどスパイ業と変わりはない。内村の場合、スパイ説が囁かれるほどに、ことソビエト・ロシアに関してはプロフェッショナルだということかもしれない。なぜながながと論を乱すような些事にこだわったのか。つぎの引用を見てもらいたい。最初の引用は吉本隆明の勧めに従って『試行』に連載したエッセー二論などを一冊にまとめた『流亡と自存』のあとがきからのもの、次は内村の「反ソ活動」をまとめた「現代ロシア論」、「国際関係論」、「未来論」とでも言うべき『ロシア無頼』の中の一節であり、極めてプラクティカルなソ連で商売をする際の処方箋、最後はすでに紹介した「エコノミスト」に書いた感懐の一部分である。

御徒町の吉本隆明の家へわたしを連れていったのは佐々木清昭である。初対面の席で何をしゃべったか今は憶えていない。ながばなしののち『芸術的抵抗と挫折』をもらって辞去したわたしは夕闇の道を駅の方へ歩いていた。すると下駄ばきで追いついてきた吉本が、雑誌を出そうと考えている、メンバーに加わらないか、とぼそりという。参加させて下さいと即座に答えたのであったが、ほどなくわたしはモスクワへ去る。

ここに、ある商社の幹部がモスクワへはじめて赴任する社員に与えた助言がある。昨年まで学生であった若い社員をいたわりながら、その幹部はいう。

先方が君の住まいに押し込んで来て手をかけるといったことはまずない。君が人混みの中を歩いているときに、日本語で後ろから声がかかってくるのだ。……(中略)…… 秘密工作というものは、公然とやってこそウラをかくことができる。だからそこがミソということになるのだ。……(中略)…… さて、そのさき君はK・G・B本館で脅される。……(中略)…… 君は

放免されてルビャンカのゼルジンスキー広場へ独り立つ。そのときおそらく暗くなってるだろうね。こんどは、君の仕事はまずタクシーを探すこと。ゼルジンスキー広場の裏手へまわると本屋街のグズネツキーモストがある。そこにタクシー待ち場があるはずだ。... (中略)..... さてタクシーに乗る前のことだが、ドアを開けたら大きな声を出して「日本大使館へ！」とやるんだね。なぜ大きな声かって？君はそのとき尾行れているのだからその尾行氏に告げるわけよ。「ムトウは日本大使館へタクシーで行ったと上司に報告しなさい！」これが尾行氏に対する君のメッセージだ。

大使館の使用人はいずれもお見事な訓練を経たソ連のその筋の者だ。守衛は君の大使館入りをさっそくその筋の上司に電話で報告する。そのあと君は館内の廊下をうろついて時間をすごし、やがてまたタクシーに乗り、自分の行く先を告げればよい。これで君はありがたいことにK・G・Bから見放される。免疫になるわけだ。免疫になるまではこれを続けるんだね。大使館員でさえ下級の者はルビャンカへつれ込まれている。大使館員と商社マンでは大違いだ。徒手空拳の商社マンには、おくにの後盾はあまり当てにならない。腕と胆をみがくこと。それが君自身の安全保障というものだ。

いま、モスクワ街頭には「市民」が見られるはずだ。.....(中略).....「タワリシチ＝同志」という語の前で小さくなっていた語「グラジダニン＝市民」。それがいま、都市ヨーロッパ風の「市民」へとついに転換するのである。そのみごとな光景をソ連のテレビが見せてくれるだろう...

このような思いをこめて頭を挙げると、目の前に見慣れたモスクワ市街がある。モスクワ河、ウクライナ・ホテル、そしてその向こうにエリツィンらの「ホワイトハウス」。

一見すると脈絡がないように見える引用群なのだが、もう少し付き合ってほしい。『流亡と自存』のあとがきで内村は「ほどなくわたしはモスクワへ去る」とさりげなく書いているが、『生き急ぐ』の出版からわずか6年後の書物の中の話である。パーソナルな面をまったく無視して内村を読んで来たものなら、冗談ではなく、「こいつ、ひょっとしたらまだロシアで取り調べを受けているのではないかな」と思ったとしても当然である。なにしろ『生き急ぐ』のあとがきで「わたしは東京八重州口のホテルの一室でこの本を一気に書き上げた。出来上がった作品には不満であるが、投げ出してその運命に委す。執筆中には深夜廊下のドアの開閉をかすかに聞きつけては思わず立ち上がった。独房の錯覚である。やはり十年の慣性は残っている。それは「生き急ぎ感じせく」日本の娑婆のくらし十年ぐらいでは消滅しないものようだ。」と書いた内村なのである。「試行」への連載が始まったのは66年2月のことであり、『生き急ぐ』のあとがきの日付は67年7月17日となっている。内村の言うとおり、日本での生活はこの時点で約10年であり、それはシベリアでの抑留期間にほぼあたる。『流亡と自存』のあとがきは72年の4月、66～67年にかけてほどではないにしろ、まだシベリアでの体験は生々しく残っていたはずであり、商社勤めをしながら、上智大学に出講していた頃のことだ。

厳しい生活が続いていたことは想像に難くないのだが、いつしか内村は彼がかつて揶揄した「パカデミズムのインチキゲンジャ」の仲間入りをする事になり、ブームに乗ってソビエトの脅威を訴えはじめる。それは恐らく自らの体験からでる義務としての警告であつたらうし、同時に見逃してはならないのは、ソルジェニーツィンやサハロフの警告の正確な伝達でもあった。エッセーやシャニャフスキーに傾倒していた時期の内村と、ソルジェニーツィンに傾倒しはじめてからの内村は違う。体験の不条理は語れば語るほど自分の内面からは遠ざかってゆき、ついに彼は体験の不条理を語るのではなく、不条理な体験を強制するシステムについて語ることになってゆくのだ。『だれが商社を裁けるか』という書物を編集した内村はもはや自分のなりわいについてはほかすという必要を認めなくなる。いや、もともとほかしていたのではなく、自分がモスクワで何をやっているかというのは、当時の彼の

書き物についていえばまったく不要であったのだ。

しかし、ラーゲリで鍛え上げられた内村の腕は、さらにモスクワで磨きをかけられていく。内村の言うように、商社マンはソ連に限らず海外に出てしまえば命の保障はない。軍や秘密警察に連行されたり、ゲリラの人質になったり、そんなことにいちいち文句をいっていたら商売などはできやしない。商売とはそもそもそんなものだ。金を動かすところに危険はつきものというわけである。ただ、内村の場合は事情が少し違う。ついこのあいだまで現役のプリズナーであった男が、今度は自分をひどい目にあわせた国の首都にいった危険を冒しながら商売をするというのである。ラーゲリではなく、モスクワが内村にとってみなれた光景となっていく点に注意しておく必要がある。つまり、ラーゲリ体験はモスクワでの商活動によって部分的に現存されながら、同時に変質していくのである。K・G・Bとわたりあいながら、あいも変わらぬ権力の醜さを思い知らされ続けるのだが、かつての強制された独房生活を問い直す視点は余りにもその強制的のシステムに近いところにあるのだ。ここが石原吉郎と決定的に異なる。石原がラーゲリの体験を自分の懐の中に抱え込み、極度に抽象化された形で発語していくのに対して、内村はラーゲリを形成する精神構造そのものとわたりあう。内村のスピリットはエゲツナク具体的であり、直接的であり、ポレミックである。

石原がその抽象性ゆえに日本の詩壇・文壇に迎え入れられたのか、あるいは石原が日本の詩壇・文壇に迎え入れられるべく抽象性を保とうとしたのかはこの際問題ではない。内村がことその文学表現においては日本の文壇の中で極めて特異な位置に置かれていたこと。ようするに、孤立し、無視されていったことだけを指摘しておけばよい。30年代の緊張など日本ではおよびではないのだ。スターリンの冷凍などはもってのほかである。政治表現が文学であり、文学表現が政治であるようなややこしい奴は目障りなのだ。具体性はまずいのだ。だいいち商品にならない。内村はだからやがて彼の商品価値をもっとも認める場所、すなわち大学へと場所を換えていくことになる。それはそれで一応筋が通っているのだが、こんなアホウなことがあっていいものだろうか。かつて吉本の詩を認めた埴谷が吉本の先鋭性を見誤っていたように、吉本も内村を正当には理解していない。別にわしがいちばん偉いのだという

わけではなからうが、吉本は鮎川信夫を評価するときはその英語力をもちあげ、内村を評価するときはその「ロシア学」なるものもちあげるのだ。

誰ひとりとして内村を問うてはいない。73年に内村は『愚図の系譜』を出す。いつものように、あちこちに書いた書評などを集めたものだ。『呪縛の構造』以来この種の批評集としては三冊目である。もちろん連載ものをまとめたものや対談集、翻訳、編集などの作業以外の話であるが、さらにこの後にも同じような批評集を三冊出している。本業を持ちながらである。大変なエネルギーである。編集者や時代が内村を要求していたとも言えるが、それ以上にその要求にこたえていく内村は吉本のような文士の意識はなく、物書きとして状況とわたりあう、いや、システムと戦っているという意識が強かったのではないと思われる。とにかく『愚図の系譜』では完全にこの種のジャンルを完成させ、広範囲にわたって発言をしているのだが、その中でも注目されるのは二葉亭四迷への傾倒ぶりである。この批評集のタイトルからもそれは明らかである。内村はロシア語を勉強した。そしてそのことが彼を彼の運命へと導いていくきっかけとなっていく。仏文学や英文学から見ればわけのわからないのがロシア文学というのが、日本での定着した見方であり、これは日本の近代化と深くかかわっている。たとえばロシア文学科や専攻をおいている大学は早稲田や北海道大学などの稀な例を除けば皆無といってよい。いまだに、である。さらに明治の西欧文化の移植期に活躍した大家、いわば開祖を比べてみればよい。英文学の漱石に比べれば、二葉亭は分が悪い。

その二葉亭に内村は可能性を見る。いや慰めを見ると言ったほうが正確か。とにかく二葉亭には系譜付けをできないことはない。シンガポールに墓のある二葉亭は日本の内側で爆発し、外へ消えていったのだから、内村流に言うところ「流亡と自存」ということになる。内村の場合はこの逆で、外で爆発して日本に戻ってくるのだ。これは日本の文化人からすれば目障りである。だいたい日本の文化人の世界は日本の社会をそのまま反映してとにかく閉鎖的である。ちょうど大相撲のようなもので、日本の中でしか成立しないのだから、この中に入りたければ鬚を結えということになる。そのままセットで海外に出せば反響もあろうし興行としても成立しようが、個人として出ていけばまったく通用しない。それに対して、下手な比喻を用いるなら、内村は

いわば個人業主であり、流血や乱闘をいとわないプロレスラー、タイツとシューズだけをトランクの中に入れて各地を流れる悪役もどきということになる。

だからこそ内村は数こそ多くはないものの、確実に読まれた書き手であったし、間違いなく一時代を画したと言えるのだ。ポップ・ディランを聴いた者たちが何処に消えていってしまったのかと問うのではない。内村の読者たちは内村から何を読み取ったのであろうか。お前が出る幕じゃないと、したり顔でいるのか。あるいはきれいさっぱりと忘れて日々のなりわいに忙しいのか。何でもよかろう。ひとの生き方は自由であるべきだ。しかし内村の圧倒的な言説を問い直すことなく受容し、「言葉かずの少ない、仕事の好きな労働者となって鉄を打っている」者もいるかもしれない。全共闘の時代に大きく旗を振っていた者が、今では中間管理職として企業の発展に尽くしているのではないかという批判をよく耳にする。あの70年安保の時代にかっこいいことばかり言っておいて、何よ、みんな嘘つきじゃないのと、カラオケをやりながらのたまう者もいる。そう言うお前は何なのだと言えば、それはドロ試合になるだけで、結局のところは、みんなメシを食らうためにはとか、エサを捨てるためにはとかいう、「実存的な」諦念で終わってしまうのがオチであろう。問題はそんなところにはないのだ。年とともに人はべつだん偉くなっていくわけではない、ますますあさましくなっていくだけなのだ、と、内村なら言うことだろう。人の意見など当てにならぬものだ。埴谷の言う自同律の不快を免罪符にする者もでてくるであろう。確かに意見や考えを変えてはいけないという法はない。しかしそれは自分の発言に無責任であってよいという保障にはならない。問題は表現にあるのだ。内村が自己の表現によって歴史に突き刺さるのは勝手である。だが、突き刺された側が、自らの小心を正当化するために内村の言説を取り入れていったなら、わたしたちはひとつの可能性を失ってしまったことになる。

あらためて解きほぐさなければならない問題は三つある。ひとつは内村にとってロシアとは何か、何であったのかという問いであり、ふたつめはその内村にとって日本は何であったのかであり、みつめは内村の読者の問題である。さてひとつめの問題だが、なにしろ『ロシア風物誌』なる書物をもの

した大家であり、ザミヤーチン論、ブローク論、ソルジェニーツイン論、エセーニン論などで恐ろしく水準の高い論考を残し、さらにトロツキーやシャニャフスキーなどのロシア語を軽々と上質の日本語に置き替えてみせる男なのだから、下手に同じ土俵にあがろうものなら木っ端微塵にやっつけられてしまいそうだ。全面対決を逃げるわけではないが、ここでは土俵にはあがらずに内村の立つ土俵そのものを遠方から狙撃してみることにする。フェアーではないが、内村の業績にけちをつけるのが目的ではないのだから我慢してもらいたい。こじつけのようになるが、この方法を取ることによって、ふたつめの問題が明瞭になってくるはずだ。なにしろ異種格闘技戦なのだから多少こちらにも有利になるようなルールにしてもらわないとまともな議論が始まらない。そのかわりにと言っては何であるが、みつめの問題についてはぐっと内村の位置に近付いてみようと思う。80年以降の内村についてはこの場では議論しない。内村がもっともアクティブであった60年代後半から70年代の初めが一応の時代設定である。内村が「虚業」としての物書きとして火を付けた戦線はそのままびつたしというわけにはいかないが、ほぼ全共闘運動に重なるといってよい。全共闘運動はすぐれて政治と文学の複合体としての表現運動であったと思うのだが、これがその本来のアモルファスな状態から徐々に体制の中に吸収されていく時期、この時期が内村の火を付けた導火線の長さであった。

文学的であるということが即ち政治的でなければならず、政治的であるということが同様に文学的でなければならなかった一瞬の時代に突き刺さったのが内村の思想である。そしてその消滅点＝バニッシング・ポイントは内村の石原吉郎論である。ここにむかってあとはただひたすらに駆け出せばよいのだろう。しかしそこで内村とともに消えてゆくわけにはいかない。

内村は極めて論理的であるが、倫理的でもある。この倫理が論理の暴走を押さえていたのであるが、倫理は彼のひどくアーシーな文体や表現にも現れる。内村の本源的によって立つところは「土・農民」である。ひょっとすると彼の生まれ育った栃木に原点があるのかもしれない。思想形成は大陸であり、彼は日本に果てしない異和感を覚えるのだが、それでも彼の感性は間違いないく日本的なのである。内村の覚える異和はラーゲリ生活を含む長い大陸

生活の後に戻ってきた時に見た、すっかり変貌を遂げた日本の近代への異和なのである。毎日生活をともにしているとなかなか同居人の変化に気付かないように、大方の日本人は日本の変貌には気付かない。当たり前である。自分も同じように変わっていつているのだから。

立松和平という作家がいる。いや、小檜山博でもよい。彼らの描く農村の都市化とそれに対するルサンチマンは感覚としてはよくわかるし、大いなる共鳴を示したいところなのだが、やはりそれは郷愁でしかない。彼らの好んで描くセックスと暴力はすでに都市の視点からしか解説されない。彼らの意図がどうであれだ。20世紀の資本主義世界に農村などどこを探してもみつかるとはならない。あるのは急速に都市化していったり、過疎化していく中で陽炎のように見えるかつての農村の残像なのである。

イギリスの作家にトマス・ハーディというのがいた。ハーディに限らず作家というものは誤解されるために生まれてきたような人種なのだが、日本などでのイメージとはうらはらに彼の文学はこの農村という共同体が近代化のなかで徹底的に破壊されるさまを描いていて強烈である。イギリスといえばなにしろ産業革命＝近代化、そして資本主義世界の総本山であり、帝国主義、植民地主義の草分けであり、いわば今日の世界の諸悪の根源的な発祥の地であり、すべての悪行の手本はイギリスにあるのだから、やっつけられる方にしてもそれまで世界史上まったく経験したことがないような辛酸をなめていく。小説の発祥の地であるイギリスの小説家たちは世界で最初に、リニアーに流れると考えられていた時間と歴史を小説空間というプールの中に閉じ込めてみせたのである。共同体が近代によって解体されていくさまは、ほとんどタイムラグなしで、まったく同一の平面上で誰にでも、いつでも経験することができる。ハーディの小説の中にもぐりこめばだ。ほかにもある。やたらセンチメンタルな演出ばかりが、その批評も含めてだが、強調されるエミリー・ブロンテの『嵐が丘』だってそうだ。あの小説は貧乏な牧師の娘が、ライト運動なんかの時代に書いた偉大なる呪いの書なのである。恋愛ものということになっているが、まともに読めばどこにそんなオセンチがあるというのだ。ツルゲーネフなどおっかなくて近付けないだろうような激しい怒り、妖気に似た絶望がある。とんでもない寒村なのに、片方の家は現代の山

手のようなお屋敷であり、もう一方には狂ったじじいや、飲んだくれや、金の亡者や、浪費家や、孤児や、要するに共同体の中の家族が完全に崩壊していて、あるのはたとえばニューヨークやロサンゼルスのような都市に住む分断された個人だけなのである。

内村のネイチャーとルサンチマンをしるためには、ブロンテやハーディの描いた世界をいっぺん通過しておくのがてっとり早い。さもないとわたしたちは内村の論じるエッセーニンの世界をぐるぐると引きずり回されたあげく、最後には何が何だかわからないまま内村に納得させられてしまうことになるのだ。ロシアといってもいろんな顔があるのは日本と同じだ。ロシア人にしてもそう。もちろんどこかでは通底するのだが、それぞれの向かうところが違うし、出てきたところも違う。力学の初歩みたいな話になるが、いろんな力がいろんな方向に働いてあやうい均衡を保っているのがわたしたちの世界なのだ。内村はソルジェニーツィンに強い影響を受けてはいる。しかし彼の著書が『ソルジェニーツィン・ノート』というタイトルになっていることが象徴的に示すように、その影響関係は相補的ではなく、一方的なのだ。そもそもソルジェニーツィンに対して相補的であれというのが酷なのかもしれないが、どちらかというとならソルジェニーツィンは内村の手に余るのだ。いや内村の知性が足りぬというのではない。タイプではないのだ。後で検証するが、石原吉郎などは簡単に料理するくせに、ソルジェニーツィンのような散文精神の権化のような男の前には内村はなすすべもない。それは晩年の鮎川信夫がソルジェニーツィンの言説をまったく無批判に受け入れたのとよく似ている。強固な散文精神の前にはポエジーなどひとたまりもないのだ。内村がもっともよく理解するロシアはロシアのポエジー、しかも土の匂いが残っているポエジーだ。少々長くなるのだが、内村のロシアを理解するためには彼が自分の文章の中で繰り返し引用するエッセーニンの作品、「母への手紙」をいまいちど読んでおく必要がある。

おっかさん、まだ元気にいるかね？

元気だよ、ぼくも。達者でやってくれ、達者にね。

おっかさんの住んでるぼろ家の上に

夕暮れともなれば あの何とも言えぬ光が射すんだらう。

お前さん、ぼくを案ずるばかりに ひどくふさぎこんでるというではないか、

心配ごとを押しかくしてさ。

時代ばなれの古めかしいシューバをひっかけ、
しょっちゅう道端まで出て来るといのではないか。

青いほむらの夕闇、そこで
しょっちゅうひとつことがちらつくんだらう。
居酒屋の喧嘩沙汰、そこで
誰かにグサリ胸元を刺されたとか、ね。

(中略)

春、わが家の白い庭で 木々が枝をぐっと伸ばすころ、
ぼくは帰ってくよ。
八年前みたいに、朝早く
起こすのだけはやめとくれ。

見果てた夢、そいつはもうよび起こさないで。
成るようにして成らなかったこと、そいつもそっとしておいて。
喪くすのも、疲れきるのも早すぎた。
そういう目にあたってこと。

それから、お祈りはもう教えないで。ね、もういいよ。
昔に還るすべはなし、さ。
おっかさん、あんただけが支え、なぐさめ。
おっかさん、あんただけがああ何とも言えぬ光なんだよ。

ね、だから、心配ごとは忘れて。
 そんなにひどくふさぎこみなさんな。
 しょっちゅう道端に出て来るなんてやめて。
 時代ばなれの古めかしいシューバを引っかけたりして、さ。

1924年の作品である。30歳で自死する前年の作である。『エセーニン詩集』に付いている内村の年譜で1925年をみるところある。「一時絶っていた飲酒を復活。九月、トルストイの孫娘トルスタヤと結婚。十一月、入院。十一月十二日～十三日、詩篇「不吉の人」を書く。十二月、レニングラードに向かう。二十七日夜、遺稿「さようなら」を血で書きホテル・アングレテールで縊死。」なんとも無残である。同じ年にトロツキーは軍事人民委員を辞任している。父なるスターリンの足音が忍び寄り時代だ。30年代の入口である。のちにトロツキーも亡命先で頭をかち割られて死ぬのだが、数え上げればきりが無いが、なんとも多くのインテリが血を流したり、追い詰められて死んでいくことが。インテリと書いたが、彼らは無数の、名も知らぬ民衆の死の中の一部であって、変革の動乱の中での死を免責されていないという意味である。

こういった異様な緊張の中で書かれた詩なのだというのを忘れて読むことができないのが、エセーニンの作品である。リルケやヴァレリーやエリオットの詩が抽象へと向かっていくのを嘲笑うかのようにエセーニンの詩は具体的である。だが、これを単に故郷への郷愁や、誰にでもわかる母親への愛だなどと、アンソロジーの選者風に読んでしまったならエセーニンの読者ではなくなる。エセーニンが歌い、内村が書きうつしているのは、立ち昇る、勝利する Kommunismus と対照的に朽ちて沈み込む、永遠にもどっては来ない共同体の破滅の姿である。敗北の詩なのである。だがそれはただの敗北の詩ではなく、繁栄する近代化やシステムを鋭く断罪する詩でもある。血で書いたエセーニンの「さようなら」はこうだ。

さようなら 友よ さようなら
 わが友、君はわが胸にある

別離のさだめ それがあるからには
行き遭う日とてまたあろうではないか

お別れだ！ 手をさし出さず ひとことも言わず 友よ 別れよう
うつうつとしてたのしまず 悲愁に眉をよせるなんて
今日に始まる死ではなし
さりとして むろん ことあたらしき生でなし

何という哀切にみちた詩であることか。内村がやたら極限状況という言葉振り回すサルトルをなぜ毛嫌いだのかがよくわかるというものだ。西欧の知のひとつの到達点であるマルクスをロシアに持ち込んだレーニンやスターリンとわたりあう内村を背後で支えていたのはエセーニンに見られるロシアの土であり、その土は遠く日本の内村の故郷の土にも通じているのである。

共産党に入党しようとさえしたエセーニンは誰しもそうであるように革命の勃発を理解していた。そして革命政権によって裏切られ、翻弄されていくことになる。だから何かに気付いたエセーニンはロシアの外にでることになる。デカダンスといえばデカダンスである。「母への手紙」をもう一度読んでほしい。喪失してしまったものの中にちらちらと喪失の原因となった自己の思い上がりに対する痛烈な反省が見える。

見果てた夢、そいつはもうよび起こさないで。
成るようにして成らなかったこと、そいつもそっとしておいて。
喪くすのも、疲れきるのも早すぎた。
そういう目にあたってこと。

エセーニンは自己を否定し、破壊することによって辛うじて彼の精神の故郷であるロシアの土の匂いを、その共同体の倫理を守ろうとしたのだ。内村が『流亡と自存』の中で執拗にエセーニンの周囲をほじくりまわしているのは、この一点を明らかにせんとしてだと断定してもよい。

だがいま問おうとしているのはエセーニンのたたずまいではない。エセー

ニンの歌によって辛うじて自己のラーゲリでの過酷で不当な生を支えた内村のありようなのだ。エセーニンは無残ではあったが、まがりなりにもひとつの自己完結を果たした。傲慢な言い方であるが、そうなのだから仕方がない。しかし、内村はどうか。彼は自分とは関係のない世界史の流れの中で、どうあがいても正当化できないような運命を強制されたのである。内村自身の「母への手紙」をしてみるほかに、手がかりはない、『生き急ぐ』の中の断章、そこにはいまわたしが試みたエセーニンの「母への手紙」と「さようなら」がまったく同じように挟み込まれているのだが、この断章を引いてみる。

目に一丁字ないと言えば、母は今どうしているだろうか。『あが母の吾を生ましけむうらわかきかなしき力おもはざらめや』これには茂吉の刻印がある。茂吉の影絵としてのかれの母が、愛玩物としての母が、いうなれば、ヨーロッパを吸いつくした茂吉という人の母がここにある。わたしの「あが母」は目に一丁字もない。「かなしき力」はそのとおりかよわいが、しかし、そのかなしさは愛玩できるようなしるものではない。いわば茂吉の抽象に対してわたしの具象があり、母はわたしにとって具象そのものだ。

初代のインテリであるわたしには母は喪失できない『楽園』だ。……
(後略)

このあとエセーニンからの引用があり、母と子の言葉を必要としない深い結び付き、内村のいう「楽園」にまつわる思い出が続く。ラカンやクリステヴァなら何という術語を使うかなどと小賢しいことにかまけている暇はない。この断章の中でも内村は「世の中はよくしゃべるやつが多くなりました。」と言っているではないか。切り離しようがない母のいる日本がはるか遠くにある。母も日本も内村からは遠い。今度は妻だ。断章は続く。

……妻のほうがはるかに近い。ついそこの平壤で別れたばかりだし、今かの女は平壤でまだ飢えていることだろう。……(中略)……妻は今どうしているだろうか。占領軍の宿舎へ働きにいっ

ているのだろうか。その夫が捕えられたソ連軍の将校の宿舎へ？ 屈辱のパンを手に入れるために？ ……(中略)…… 日本へ帰る？ 帰るのもいいが何しに帰る？ 日本は遠い。その遠さは少年への距離でもある。小学校までがわたしの日本だ。中学からはもう旅順で暮している。わたしの心象では日本は遠く満州が近い。ものごころについてから十年このかたわたしは満州で暮し、満州で愛し、満州で敗戦を迎えたのだから。……(後略)

対談などを除けば珍しい内村のパーソナルな回顧である。もちろん彼が回顧をまったくしないわけではない。むしろかれのおよそあらゆる書き物は過去に関するものなのだが、それは歴史的現在へ突き刺さろうとする彼のアクチュアルな姿勢の陰にあって決してセピアな色合を帯びるものではなかった。それは不当な強制を絶対に認めまいとしてシベリアを生き抜いてきた内村の知恵であり、自己の律し方であったと思われる。ところが、陳腐な言葉ではあるが、内村はデラシネ この語に変な感傷のニュアンスをおっかぶせたのは誰だ として日本に舞い戻ってくることになったのである。彼を支えた倫理が、生きた倫理として存在する場を失った日本にである。

内村はシベリアで腕を磨いた。へなちょこな学者やそこらへんの文士どもがよってたかってもちうちできないまでの論理をぶらさげて日本に戻ってきた。彼の言う「ミニコミ」であるところの書評紙から始め、彼は腕を奮って書き書いた。それはすでに述べたとおりだ。状況は彼を必要としているように見えた。内村の興奮ぶりは、『流亡と自存』の中に収められている吉本隆明との往復書簡である「情況への発言」に今も生々しい。状況へ突き刺さることによって彼は自分の表現を獲得し、日本のすでに消失したはずの「ナロード」へ回帰しようとしたのかもしれない。しかし、多くの編集者も、読者も内村のそのような目論見とは無関係に彼のすご腕だけに酔いしれたのである。いつのまにか内村はロシア文学者、ロシア学者、ソ連ウオッチャー、名前は何でもよい、便利な専門家として「有名」になってゆく。『信の飢餓』、『ナロードへの回帰』と来て、75年に70年代初頭に書いた文章を集めた『初原の思念』を出した頃にはさすがに内村もくたびれてくる。「呪縛の構造」

だの「生き急ぐ」だの「わが思念を去らぬもの」だのといった初期の頃のタイトルと比べてもかなりトーンダウンしてきているのがわかる。高橋和己も村上一郎も死んでいった。アホらしくなったのか、その後しばらく静かにしていた内村が突然のように爆発するのは、石原吉郎の死を契機としてである。

「死んだのである、石原が」で始まる、『現代詩手帖』に連載された石原吉郎論は内村にとっては極めて重い意味を持つ。日本人のひとりの物書きに關しての集中的な批評は内村にとってこれが初めてのことであった。石原の生と死は他人ごとではなかったのである。内村の読者がどうのこうのとか、内村が火を付けた戦線がどうしたなどというわたしがたてようとした問いかけなどもうどうでもいいくらいに、内村は執拗に石原の存在に迫っていきこうとする。それは『失語と断念』の前半で内村が懸命になって石原という人間をほじくりかえしているのを読めばわかる。誰のためでもない、自分のための石原論である。真正面から石原を見据えようとする内村の文章は美しい。解説など必要はない、いや解説というふやけた介入を断固として拒否する緊張感に満ちているのだ。自らの『ナロードへの回帰』からの引用　そこでは石原の文章が引かれている　をさらに引くというややこしい作業になるが、内村のいうところを要点だけ書き抜いてみる。

希望が一切持てないにもかかわらず、なお他の精神をいたずらにそこなうようなことだけはさしひかえようとして沈黙する者がある。

彼は沈黙し耐えることによって絶望を拒否する。

私にとってはたとえば石原吉郎がある。そして、ついに見ることのないであろう「私の読者」がある。

私は何度でも石原を引用する。

くりかえし自分に問うてみなければならない。希望を捨て去るのはよいことか。戦いを拒むことは許されるか。僕はまだそれをけんめいに

自分に問うていない。

その人たちは誰を支配しようとも思わず、また支配する必要もなかったであろう。その人たちは、このようなすさまじい流れの中で、ただ切なく愛しい、むつみあって行くほかには、なにもできないし、なにもしなかった人たちにちがいない。

そうして、未来はこのような人たちだけに属し、革命はこの人たちのために行われるのである。

..... 併し私は知っている。血なまぐさい何週間かの混乱ののち、いちはやくのしあがってくる奴は、昨日とおなじ奴らであることを。.....

日本がコンミュニストの国になったら（それは当然ありうることだ）僕はもはや決して詩を書かず、遠い田舎の町工場の労働者となって、言葉すくなく鉄を打とう。

内村は死と生をかりうじてつないだのが石原にとっての詩であったという。そしてもちろんこのことを知るためには「石原のシベリア」について「何ほどの思い入れをしなければ」ならない、ともいう。シベリアでは、そして現代ロシアではひとはなべて詩に属するからである。かねがね日本の詩壇をばかにしてきた内村はここでもあいかわらずの激しい罵倒語を日本の詩人と呼ばれる者たちに浴びせかけている。内村の怒りもわかるし、まさに正論であるのだが、なぜか寂しい。詩に対する考えがまったく違うところでは、もう説得など無理なのだろう。わからせる必要もわかってもらう必要もぜんぜんないのだが、この段階で内村が、何度でも石原を引くといっていた内村が、石原からも、つまり最後の可能性、内村が日本に交わる最後の可能性を否定していくであろうことは十分に予測できてしまうからだ。本郷隆や斎藤保といった詩人もでてくることはでてくるのだが、内村はやはりロシアに、マンデリシタムのほうへ走り去っていくのである。

かつてある日本の若い詩人が石原へのコムプレックスをそのままに、決定的な体験の差があると嘆くのを読んで、わたしはなんというばかな奴がいるのだらうと思った。べつだん内村のように、それでも詩人か、甘ちゃんというような罵倒はしなかったが(できなかったというべきか)、内心の疑問をそのまま口にしてみた。わたしの周囲の連中はひややかであった。やっぱり、お前、落差はあるよというのが大方の反応であったと記憶する。しかしそうなのだろうか。体験の落差があって、それが決定的であるなら表現など必要ではないか。わたしたちは表現にかかわる時、体験を越えて、ある立場を強制されるというのが本当ではないのだろうか。内村にしても、石原の詩に迫ろうとする時、なにがしかの思い入れをしなくてはならないのである。「実証を断念しなければならぬところで近代の学問はストップする」と内村は手強くも見抜いている。

さて内村は強引に石原の内部世界に押し入ってゆく。ひとの命は実証できないからといってそこでストップするわけにはいかない。詩が生と死をつないでいるのなら、詩を読み解くためにはひとさまの生の中にでも押し入る他はない。おせっかいな奴ということなかれ。内村は真剣なのだ。プライバシーというのはぬるま湯につかるヘチマ野郎のなきごとでしかないと知らなければならぬ。ラーゲリのどこにプライバシーがあるというのか。

強引に押し入った内村はそこで何を見たか。とんでもない荒廃をである。石原の戦前の生き方から執拗に石原に迫っていた内村は、その荒廃が突然シベリアで降って湧いたものではないことを知ることになる。内村は知る。ジャパンはすでに荒廃し尽くしていたのだと。内村はだんだんロシア人になっていく。

だから石原が「この世」というとき、それは「この世」つまり「娑婆」とりわけ「日本の娑婆」を意味し、そこに向けてはラーゲリの失語はいつかな回復しそうにないということであろう。だが石原は思い上ってはいけぬ。シャラーモフがあえてしたような非在から存在へのブリッジを試みることなく断念を観想するといったことがあってはならない。現代ロシアのこの意志的精進を知りつつ、それを他人事とし、

その他人事をさとりに顔に日本の娑婆に伝えるだけなら、石原よ、お前なんてくそくらえなんだ。

いくらでも書くことはある。いくらでも考えることはある。『失語と断念』にはそのための豊富な材料がいくらでもある。百枚でも二百枚でも書けるだろう。しかしこの「失語」は内村の失語であり、この「断念」は内村の断念でもある。アフマートワの詩をロシア語とドイツ語で7頁にもわたって引用し（それは石原吉郎の霊前への線香がわりではあるのだが）、石原よ君はハッピー・ジャパニーズとともにあると言って去って行く内村はついに日本へは帰ってこなかったのである。

さて、その内村の読者はどうなるのか。内村とともに日本を去るのか。否である。あと10行で答えよう。内村剛介はもはや政治的表現も文学的表現も、つまり「自由」はラーゲリにしかないかと断念した。そして世界はラーゲリであるという。内村にこう返そう。くそくらえであると。なるほど、表現は内村の言うように、すでに書き言葉をこえている。しかしそんなことはわかりきったことじゃないのか。書き言葉の空しさに耐えかねて、60年代に生きたものは街頭で、路上で表現を試みたわけではないのだ。世界はラーゲリでもあるが、ゲッターでもあり、ソウエトでもあり、ハーレムでもあり、山谷でもあり、釜が崎でもあり、何でもあるのだ。書き言葉による表現は最勝義において敗北の表現であるが、それはエッセニンの「さようなら」でみたように勝者と思っているものどもの断罪でもあるのだ。だが敗北や断罪というのは前近代から近代へ移行するときの言葉だ。近代は沈黙を要請するシステムである。ならばわたしたちはふたたび語りはじめ、このシステムを破壊しようではないか。もちろん、自らの責任においてである。